

NPO法人

日本産漆を支援する

壺木呂の会

I C H I K I R O

－クロメ会特集号－

会報
第13号 / 2016年10月発行



「目次」

はじめに

3 日本漆アカデミー共催
2016年度 壺木呂の会クロメ会

4 壺木呂の会のクロメ会に参加して

6 2016年クロメ会に
参加させていただいて

8 黒呂色漆の失敗は成功の巻

9 川越の桶屋さん

11 お知らせ

理事長 本間幸夫

日本漆アカデミー実行委員 神谷嘉美

宮崎聖良

正会員 中島敦子

本間幸夫

[表紙]



縄文時代の漆掻き再現では、工藤先生の指導によりご用意頂いた黒曜石のナイフで漆に切り込みを入れました。すると乳白の漆樹液が浸みだし、参加者はとても感動していました。

クロメ作業



一般的に生の生漆を中塗りや上塗り用などの目的に仕上げることで、ナヤシという作業からクロメという一連の作業を指します。

ナヤシという作業は簡単に申しますと漆の幾つかの成分を微細にすることが目的です。その上で25%前後含まれている漆液の水分を、温度を余り上げずに3から5%程にする作業です。温度が上がりすぎると漆を硬化させるために重要な酵素の活性を失わせてしまいます。日なたでのクロメ作業の時、天気が悪く温度が上がらない場合は反射型電気ストーブや石油コンロを用いて温度を保つようにします。

クロメの仕上がりが見極めが難しいのですが、最終段階では急激に温度が上がらないように注意が必要です。

はじめに

日本漆アカデミー共催

2016年度 壺木呂の会クロメ会

理事長 本間幸夫



クロメ会冒頭に日本漆アカデミー会長のご挨拶

壺木呂の会では、長い年月、日本の漆産業界や個人作家の使用する漆の多くが中国産に変わってしまった中、日本産漆の使用量を増やしていくためには、第一に使い手が日本産漆を知る事が重要と考えるようになりました。発足の翌年、平成10年からほぼ毎年、個人が購入した漆を1キロほど手クロメによる精製の勉強会を行い現在に至っています。先日行われまして第16回クロメ会は日本漆アカデミーの、文化庁「ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業」の一環として、初めての共催事業で行なわれました。壺木呂の会としてとても光栄な事と思っております。

クロメ会は漆の個人個人による使い方に見合った精製方法を勉強する会ですが、産地や仕事の内容によって皆さんが良いという漆に決まった形ありません。正会員に日本産漆の使い方に慣れ親しんで頂くことで、塗り手から塗り手へ消費者へとその輪を広げて頂くことが日本産漆の需要を増すことになると考えてまいりました。

今回もそのほか、ウルシの草木染め、佐々木由香先生による「縄文人とウルシの関わり」と題した講演、工藤雄一郎先生の指導による植栽地での「縄文時代の漆掻き再現」実習、会員の指導による「はじめての香道」など、多くの漆に係わるイベントで皆様が充実した時間を過ごして頂けるように企画しました。

会期の前後が台風の影響で雨の日が多く、クロメ他のイベントが野外の作業が中心で心配しました。奇跡的にも天候に恵まれ今回は大変参加者が多く、9月10日クロメと草木染めに60名、宿泊者40名で翌11日のイベントには50名以上の方が参加と、いつもより大変賑やかな会となりました。

最後に日本漆アカデミーからご参加頂きました、明治大学名誉教授・宮腰哲雄会長、国立研究開発法人森林総合研究所・田端雅進先生、また奈良県や石川県輪島市、加賀市、長野県など、遠方からご参加頂いた皆様に壺木呂の会を代表して心よりのお礼を申し上げます。

今まで私自身が参加したことのあるクロメ研修は、機械精製でも手クロメでも沢山の量の生漆を一度に使用し、一つの道具で参加者が交代しながら行うものだった。つまり、素黒目漆と黒呂色漆は一種類ずつしか作れない。それと比べて杵木呂の会では、各自で用意した様々な日本産生漆を少量ずつ持ち寄り、それぞれ別の道具を使用し、個人個人の思うような精製漆を目指して自由に仕上げていくものである。それは実際の場に参加してみると、聞いて想像していた以上に賑わい、熱気のある時間だった。各自で考えながら手を動かし、情報を交換しながら試行錯誤して漆液を仕上げていく様子は、一人の

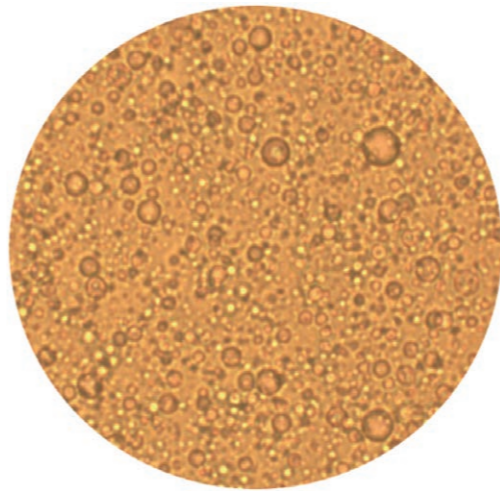


写真1：生漆液を透過光で見た顕微鏡画像

教師の授業を全員で聞く講義形式とグループ実習の違いにも思えた。写真1は生漆液を透過光で見た顕微鏡画像で、牛乳と逆で油分に水球が分散している。この主成分ウルシオール中に分散している大小様々な水球のサイズを、できるだけ小さな粒にして均一にウルシオール中に分散させることが「なやし」の意義だ、と頭では理解している。しかし自分の作品を生み出すために、どのような漆が必要なのかを認識し、それがどうすれば獲得できるのかを主体的に考えることが重要で、そこへ至る過程を自身で知ることが大切なのだと思えられた気がする。これは今回の全てのイベントに一貫していたと思う。優良な漆樹を問うための試験林畑や4メートル間隔に挑戦した漆樹の植栽場、採取後の漆樹を利用した足場(写真2)、採取された漆樹の活用法としての漆染めがあり、作り出された漆器を用いる香道の世界を味わっては、現在の漆掻きと縄文時代の採取法との比較までを体験…このような素晴らしい機会を得たことに心から感謝している。漆染めでは布の種類や媒染剤によって色彩のバリエーションは豊かになると体感し(写真3)、黒曜石での漆掻き体験の際に15センチ間隔の間に傷を増やすと生漆液がさほど出てこない様子を目の当たりにし、漆液をもたらす漆液溝は樹としては



写真2：採取後の漆樹を利用した足場

最表面に近い(写真4)ので、採取後の木材利用は課題であるとよく分かった。また石斧で漆樹の伐採に挑戦したものの石だけが何度もはずれてしまい、道具の扱いの難しさを痛感しつつ、漆樹の杭を見ることができたのも嬉しいものだった(写真6)。「うるし」と言っても、使い手ごとに想う「うるし」には違いがある。漆樹そのものであったり、採取された生漆であったり、塗料へ加工されたさまざまな精製漆であったり、漆器や漆塗装物だったりするので。だからこそ「うるし文化」を守り伝えていくためには、その文化に見られる要素の一つ一つの技術がどのように形成されたのかを知ることが重要になる。毎年開催している漆サミツ

ポリエステル
絹
アクリル
ビスコースレヨン
毛
ジアセート
ナイロン
綿

ト(2016年11月3日〜5日開催)でも様々な立場の方々が交流し意見交換をすることで、漆業界全体を盛り上げようとしている。多様な情報を互いに共有できる場が増えていくことは、きっと大きな力になる。「使い手が日本産漆を知る大切な場」に色んな人間を受け入れる今回のような機会が増えるほど、「うるし応援団」が多くなるのだと感じられたクロメ会であった。



鉄媒染 錫媒染 銅媒染

写真3：JIS染色堅ろう度試験用白布を使用



写真5：黒曜石の傷から出た樹液



写真4



写真6：漆樹の杭

2016年クロメ会に

参加させていただいて

宮崎 聖良

9月10日(土)、11日(日)、2016年クロメ会に
ビジターとして初めて参加させていただきました。

1日目は、奥久慈の萩房にて正会員の方々のナヤ
シ作業、クロメ作業を見学させていただきながら、漆
の木の草木染めを体験しました。

漆の草木染めでは、初めに漆の木を煮出した染色
液に布を浸すと、レモン色に染まったのですが、次に
媒染液に浸すと、あつという間に色が変わるのがま
るで科学実験をしているようでした。私は銅の媒染
液を選び、茜色のような濃いオレンジ色に染め上げ
ました。他に用意されていた錫の媒染液は濃い山吹
色に、鉄の媒染液はカーキ色に染まり、どれもとて
も深みのある色合いです。中には、何色かで染め分
けたり、絞り染めをされている方もいらして、私も何
か工夫をすれば良かった!と感心してしまいました。

その後、皆さんのクロメ作業の見学をさせていただ
く中で、中島敦子様のご厚意でクロメ作業を体験
させていただきました。太陽が当たるよう斜めに傾
けたクロメ桶の中にある生漆を櫂ですくい上げ、な
るべく均一に漆を桶の底に滑らせて余分な水分を抜
いていくのですが、実際やってみると難しく、すくい
上げる漆の量がまちまちになったり、太陽が雲に隠



染め込んだ後、水洗いしたショールなどを干す

石斧での伐採はさすがに大変で、少しずつ木の繊維
を切り離していくという感じでした。何度も何度も
石斧で木の幹を打ち、やっと倒れた時にはすごく達
成感がありました。

それから、実際に今漆掻きを行っている現場を見
学させていただき、現代の漆掻きも体験しました。
鎌でまず幹の表面の皮を削り、鉋で5ミリくらいの
幅の溝を作り、さらに尖った部分で先程つけた溝の
真ん中あたりにキズをつけて、出てきた漆の樹液を



石斧で漆の木を伐り倒す

へうで素早くさらってタカッポに入れる、という一連
の流れを体験し、出てきたわずかな樹液を上手にタ
カッポに入れるのは本当に難しいと感じました。そ
して周りの漆の木にはきれいにキズがつけられ、漆の
性質に応じて印がつけられており、いかに大切に漆
掻きを行っているかを間近で拝見することができま
した。

最後に香道体験に参加しました。微妙な違いの香
木の香りを聞き分けるといのは難しかったです。そ
れよりも香りに集中して自分の中にイメージを
作ったり、香りにつけられた美しい名前を楽しんだ
りという体験ができ、またゆつくり香道を体験した
と思います。

私は、近年国産漆の生産が危機に瀕しており、そ
のために少しでも自分が何かできないかと思ひ、漆
の植栽や漆掻きに興味を持ち、今回のクロメ会に参
加させていただきました。私のような初めて参加す
る人間にも、大切に育てた漆の木を使って漆掻きな
どの貴重な体験をさせていただき、大変感謝してお
ります。今後ぜひ杵木呂の会の活動に参加、協力
させていただきたいと思っております。

いつか自分で漆の木を育て、漆畑を作ってみたいと
いうささやかな夢を持っています。まずは自分がやっ
てみたいということを発信し、漆についてもっと勉強
する活動にも積極的に参加していきたいです。
今回お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

れてしまうと漆の温度が下がったりしました。でも
せっかくなのでご厚意と大切な漆を無駄にはできないと
いう思いから、ひたすら何とか良い漆になって欲しい
と願い、作業をしました。本当に地道で繊細な作業
を経て大切な漆が出来上がるのだと実感しました。

1日目最後は、かめやさんに移動し、美味しいお
料理をいただきながらの懇親会となりました。その
中で、奥久慈漆生産組合の神長様から漆の木で作ら
れた盆をお借りし、お酒をいただく機会に恵まれま
した。漆の盆にお酒を入れると、漆の黄色がキラキ
ラと黄金のように輝いていて思わず見とれてしま
いました。

2日目は、早稲田大学の佐々木由香先生による
「縄文人とウルシの関わり」と題した講演、国立歴史
民俗博物館の工藤雄二郎先生ご指導の下、縄文時代
の漆掻き体験、石斧による漆の木の伐採、漆植栽地
の見学、会員の香道の先生による「はじめての香道」
体験を行いました。

佐々木先生の下宅部遺跡から発見された漆の木
が水辺の杭として使われ、さらにその漆の木にはほ
ぼ一定の間隔でぐるっと一周キズがつけられており、
下宅部遺跡にいた人々が漆掻きを行い、掻き終えた
漆の木を杭として再利用していたのではないかと、い
うお話は大変興味深いものでした。



香炉に香木を置く



真剣に香を聞く参加者

黒呂色漆の失敗は成功の巻

正会員 中島 敦子

クロメ会に参加して12年。毎回少しずつ個性の違う漆にはなるけれども、いつも立派な精製漆となつて自宅に持ち帰ってきました。

ところが今年初めて、ナヤシ途中の漆を持ち帰ることに。なぜなら今年の漆は事情があり、新しい漆掻きさんの漆を分けてもらいました。その漆に少量の水でしめらせた、いつもよりやや多い1%の鉄粉を加えましたが、全く色が変化しなかつたからです。

普段ならすぐに灰色に変わるのに：本間氏のアドバイスで新たに0・7%の水で湿らした鉄粉を加えても変化ナシでした。ビニール袋に入れ持ち帰り、翌日やっと1-3程灰色という反応の鈍さにもう一日待ち、翌々日8割ほどの変化に加え晴天に祈りを込めクロメる事にしました。漆温30度代を推移し、3時間でクロメを終了しました。

いつも通り井に寒冷紗を敷き大きなゴミを濾し取ると、絞られた寒冷紗はジャリジャリとした鉄の塊と化していました。濾された呂色漆にはまだ通常より多めの鉄粉が混入されていて、そのままでは粘度の高い漆になり易いので困ります。4日待つて上澄みを取ることにしました。少しづつ井

を傾け1-3程流れると、驚くことに完全に分離して鉄粉が黒い塊となつて井の底に壁のように有りました。上澄み漆はサラサラで使い易そうです。

その後本間氏から、クロメ後井に入れず、ビニール袋に移し、強力磁石で鉄粉を袋隅に引き寄せて除去する方法も有るとアドバイスされました。それは出会いたくないが、またこの状況に出会ってしまったら試すことにします。

この黒呂色漆はもう二度上澄みを取つてから、ワタを混ぜて濾して使うつもりです。楽しみます。何年やつても漆は不思議がいっぱいで飽きません！

《本間氏より補足》

漆は採取する漆掻きさんによっても性質が大きく異なることがあります。それは採取の仕方により

明治大学名誉教授の宮腰先生もクロメ会の現場におられ状況をお話しました。その折、先生の説明では漆の水分量の割合が有る限界値をこして下がる

鉄との反応が遅くなる

川越の桶屋さん

本間 幸夫

桶屋さんは現在周囲を見渡しても激減しています。2・3年前の調査でも全国に60軒は無いとのこと。私が日本産漆を使い始めた30年以上前は安価なプラ桶などもない時代でしたし、道路際に檜の風呂桶を置いている桶屋さんがずいぶんあった様に思います。お気付きの方も多いと思いますが、漆掻きと同様の社会現象です。

漆の仕事を始めて間もない頃は、漆の精製の仕方を調べたくともネット検索があつたわけでもなく、本屋に頼んで「日本漆工の研究」という分厚い本と、昭和48年文化庁から出版された「螺鈿」と「蒔絵」の2冊だけが頼りでした。

あるご縁から弘前大学の佐藤武司先生と知り合い、漆の接着性能について勉強する機会を頂き、試験片を作つては大学に送つてテスト結果のデータを頂くことを繰り返しました。日本産漆で採取時期の異なる漆を購入し、それぞれの性質を調べるため、分けて保管することになりました。その当時は鎌倉の桶屋さんから購入していましたが、数年後にはそこも廃業されて川越の荒井さんに出会うことになりました。

クロメ会に参加している方はご存じだと思いますが、荒井桶店で制作して頂いた直径1・5メートルのとても大きな檜のクロメ桶があります。20年



文中の桶より一回り小さい、黒漆専用1.4メートルのクロメ桶



麦漆で接合するために特別に注文した尾州檜の桶

以上前にお話し作つてもらったのですが、我が家にトラックが届いた時はその大きさと重さに大変驚かされました。家のどこに置くのですかと家内には叱られ、2階の物干しの隅で使うこともできず肩身の狭いおもいで置かれていました。当時20万円程でしたが、勿論家内には内緒でした。でも奥久慈の工房ができてからはその本来の仕事ができる様になり安心していきます。

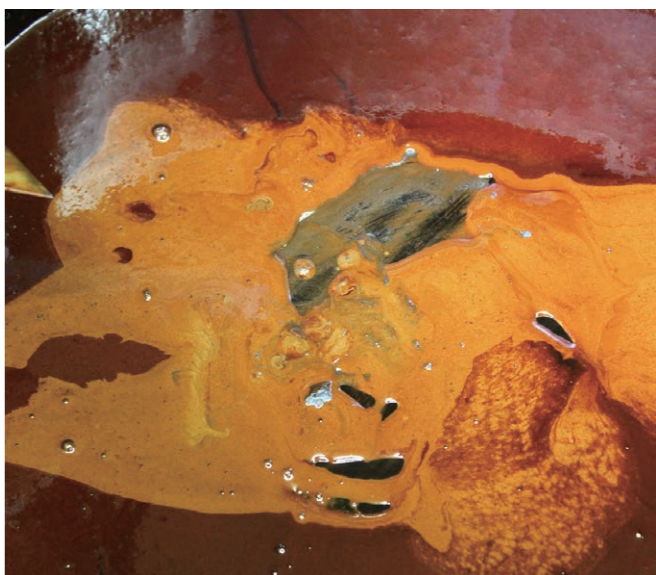
最近ではどこで作つたのか聞かれることも多くなり、今回はクロメ会参加者に三尺のクロメ桶数個と漆保存用の杉の柾目材で作る漆桶を頼まれました。

荒井さんの話ではなかなか注文も少なくなり、材料を仕入れることの数回が減つたそうです。店先の棚に所狭しとあつた色々な桶類や花入れ、角樽なども今はその数が少なく棚に隙間がある状態です。

漆掻きの道具で掻き鎌の製作者がたった1人になり、現在その開発支援に我々の会も活動を始めたことは前号の会報に書かせて頂きました。一つの文化を支えている職人さんは多岐にわたります。漆掻き、保育管理者、掻き鎌、今取り上げている桶など、漆の原液一つとってもこれだけの皆さんがそれを支えていたのに我々は目を向けようとしてい

なかつたのです。

現在埼玉県内ではすでに2軒になってしまったそうです。荒井さんは、私がいれば1軒になるね、と：寂しそうに仰いました。



水で湿らせた鉄粉を混ぜ始める



15分ほどで、この様に鼠色に変化するはずでしたが...

壺木呂の会について

私たちが作る漆器の原材料である日本産漆の現状は、漆掻きの高齢化と後継者難、中山間地域農業の疲弊荒廃による漆木の激減とが重なり大変厳しいものがあります。

9000年以上という気の遠くなるような長い歴史を持ち、日本の代表的な工芸である漆芸の基本材料が、危機的状態を迎えてしまうことを、大変憂慮しております。

国産漆の使用量は年々減少の一途を辿り、現在国内で使用される国産漆の割合は1～2%あるかないかという状況です。

1997年、国産漆の需要が減り、漆掻き職人がどんどん減り続けたころ、危機感を感じていた17名の漆作家が先ず需要面で漆掻きの仕事を守りたいと、壺木呂の会を立ち上げました。

その後、2009年より新たな取り組みとして賛助会員制度を設け、漆の苗木を新植し、漆畑を作る活動を始めました。

茨城県常陸大宮市の国道118号沿いに奥久慈漆・第一見本林を造成し漆の木のオーナー制度も設け、現在70名以上のオーナーに支えられています。

昨年までに皆様のご支援によって第5次見本林が立ち上がりました。



オーナー制度のプレートが付いた第一見本林(数年前の映像)

第一見本林は漆を掻けるようになるのには後3年の歳月がかかります。2014年からは新宿伊勢丹を始めとして、茨城県常陸太田市の梅津会館、先月は、北鎌倉東慶寺ギャラリーなど、会員による漆芸展を展開し、日本産漆の良さを多くの方に見ていただくという広報活動にも力を入れています。

壺木呂の会は3年前からNPO法人として、新たに活動の輪を広げ、民間の力を中心に、出来ることを一つずつ進めていこうと考えています。

理事長を含め理事、実行委員全員が無給のNPOで経費以外は手弁当に近い状態で活動しています。

皆様の会費などの支援を元に輪島などへの苗木支援と植栽のお手伝い、又漆掻き鎌の制作支援や技術保存に取り組み、日本産漆の抜本的な問題への支援活動を行っています。

我々の活動にご興味がありましたら、どの様な形でも結構です。ご支援頂ければ幸いです。ご不明な点なども、是非メールか電話などで事務局までお問い合わせ下さい。

※1 佐々木 由香

株式会社 バレオ・ラボ

早稲田大学・昭和女子大学非常勤講師

「下宅部遺跡の復元かご製作からみた縄文時代の編組技術」
「縄文人の植物利用―新しい研究法から見えてきたこと―」
「縄文人の暮らしについて幅広い見識を持ち特に下宅部遺跡での長年の調査研究は大きな成果をもたらしました。」

※2 工藤 雄一郎

人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 研究部考古研究系 准教授

壺木呂の会にも大きく関わっていただき、専門分野は発掘された文化財の年代測定ですが、特に縄文時代の漆掻きと植物利用に関する、研究者としても有名で著書に『旧石器・縄文時代の環境文化史』、編著書に『ここまでわかった！縄文人の植物利用』などがあります。

※3 宮腰 哲雄

明治大学 名誉教授

衰退する漆業界と消費者の漆離れの進む現代、産学官民の関係者を横に結ぶ活動と、持続的な振興と発展のため漆サミットを作り上げ現在日本漆アカデミーの会長をされています。ウルシの化学的な分析や香りなど高分子化学における現代の第一人者で、現在も明治大学の研究室を持ち活躍しておられます。著書に『漆学―植生・文化から有機化学まで―』などがあります。

※4 田端 雅進

森林総合研究所東北支所 産学官連携推進調整官、専門分野は植物の病虫害の研究、特に近年ウルシの優良品種の選定増産のためウルシのDNAレベルでの調査など幅広い活動をされています。

【お知らせ】

● 桶注文

「川越の桶屋さん」でご紹介しました荒井桶店の価格表になります。クロメ桶は杉桶に比べ安めと思います。3尺がお勧めです。

クロメ桶(サワラ材)	2尺5寸	25,000円+消費税+送料
	3尺	27,000円+消費税+送料
漆保存桶(杉の柾材)	4寸5分(内径×高さ共に)	5,000円+消費税+送料
	6寸(内径×高さ共に)	6,000円+消費税+送料
	7寸(内径×高さ共に)	7,000円+消費税+送料

● クロメ映像

クロメ会で撮影した下記内容を年内にまとめDVD(無料)を制作します。ご希望の方は着払いで送ります。無断利用されないよう映像には、壺木呂の会のロゴが端に入っています。

- ・素黒目漆のナヤシとクロメ
- ・黒漆のナヤシとクロメ
- ・縄文時代の漆掻き再現

● 著書紹介



縄文時代の漆掻き再現や講演で大変お世話になっています、国立民族博物館の工藤雄一郎氏の著書『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社 定価2,500円+消費税 絶賛発売中。

『さらにわかった！縄文人の植物利用』新泉社 (2017年2月刊行予定)

- 桶、クロメ映像DVDをご希望の方は事務局までFAX、またはメールにてご連絡下さい。



会 報
第 13 号 / 2016年10月発行
- クロメ会特集号 -

NPO法人 老木呂の会事務局

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 2-27-3

Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147

<http://1kiro.jp/> ✉ nihonsan@1kiro.jp

[f https://www.facebook.com/1kiro.jp/](https://www.facebook.com/1kiro.jp/)